

日本とフィンランドの異分野協働によるくずし字セミナーの実践[†]

畑 有紀*・布施 倫英**

新潟大学日本酒学センター*・ヘルシンキ大学人文学部**

本稿は、2019年にヘルシンキ大学で開催された「くずし字セミナー」をめぐり、共同責任者である2名が、開催に至る経緯、当日の様子のほか、その成果や今後の展望を報告するものである。本セミナーの意義は、同大学の教育支援、あるいはくずし字を解読できる人材を養成することによる古典文学研究の発展にとどまらない。北欧の日本学が抱える問題を解決し得る教育事例でもあり、また、日フィン両国における複数の出版物、フィンランド国立図書館での展示会など、セミナーを契機に多様な成果が生み出された。さらに、異国間の異分野協働の実践である点でも貴重な取り組み事例である。以上から本稿では、このセミナーを通じ、日フィンの異分野協働による教育活動がもたらした可能性と課題について紹介したい。

キーワード：国際連携、異分野協働、学際的連携、日本古典文学、日本語教育、くずし字

1. はじめに

本稿では、2019年10月に開催された「ヘルシンキ大学くずし字セミナー」(Kuzushiji-seminaari Helsingin yliopistossa 2019)について、開催に至る経緯、当日の様子、教育研究上の成果、そして今後の展望を報告する。このセミナーは、名古屋大学が採択を受けた日本学術振興会「国際的な活躍が期待できる研究者の育成事業」の一環として開催されたもので、報告者2名は、セミナーの共同責任者である(畑は当時、名古屋大学研究員として本事業に携わっていた)。

セミナーは、ヘルシンキ大学で日本語・日本文化を学ぶ学生を対象に、4日間の集中講義形式で開講された。講師は日本国内の大学に所属する古典文学研究者で、くずし字(主に変体仮名)の解読法から和書の種類や形態、内容、調査方法に至るまで、広く日本の書物の歴史を扱った。その意義は、上記の事業遂行や大学教育への貢献だけに限らない。北欧の日本学が抱えるリソース問題解決の一助となり、両国での複数の記事・雑誌の出版、フィンランド国立図書館での展示会など、セミナーを端緒として多様な成果が生まれた。

加えてこの一連の取り組みが、日本の古典文学研究者の畑と、フィンランドの日本語教育学研究者の布施による異分野協働の教育研究活動であるという点、そして日本国外での実践である点も有意義と言える。日本語教育における異分野協働の実践例を調査した中川

(2021)は、協働の手順や内容、分担内容が明瞭に記録された報告は稀であるとし、異分野協働には「背景や視点の異なる者同士がいかに協働していくかというマネジメントの側面が強くなる」ことから、過去の実践による知見を共有する必要性を指摘する。また、同報告が取り上げる異分野の専門家との協働事例は、いずれも日本国内の例である。よって本稿は、国際的な異分野協働をめぐる貴重な実践報告と位置付けられる。

なお欧州でのくずし字教育は、毎年、日本資料専門家欧州協会(EAJRS)が国文学研究資料館と共同で数日間のワークショップを開催しているほか、ごく少数の大学で学習機会が設けられているのみである。本稿は、数少ない欧州でのくずし字教育実践報告でもある。

2. セミナー開催までの経緯・準備

2.1. 名古屋大学の採択事業の目的・概要

名古屋大学の採択事業「西欧の日本学研究者とのネットワークを通じた日本人若手研究者の国際化—絵写本・版本研究を中心として」(2017年10月～20年3月)は、日本と西欧の研究者が、双方に所在する中世や近世の文学・絵画資料の分析研究を共同で行うもので、日欧の日本学研究ネットワーク構築が目的とされた。伊藤信博氏(椋山女学園大学教授)および近本謙介氏(名古屋大学教授)を代表に、日本、フランス、ドイツの研究者43名から組織され、主な拠点は名古屋大学、ストラスブール大学、ハイデルベルク大学に置かれた。

[資料・報告]

事業の一環として4名の日本人若手研究者が西欧に派遣され、現地の学生、研究者、図書館員らにくずし字の解読法を教授するセミナーを開催した。これは、西欧の学生のくずし字解読法の修得が、現地の日本学の発展および将来の国際共同研究に資するとして計画されたもので、フランスとドイツでは、数か月に渡るセミナーを催した。たとえば、派遣者の1人であった畑は、事業期間内にストラスブール大学とフランス国立極東学院でそれぞれ全10回ほどのセミナーを開催した。

2.2. くずし字セミナー計画の発端

報告者らは2018年9月、カウナスで開催されたEAJRS年次大会で出会った。EAJRSは、主に欧州の大学や図書館、美術館に所属する研究者、司書、学芸員ら、広く日本資料関係者によって構成される。畑は上記セミナーについて、布施はヘルシンキ大学における日本学に関する電子資料の使用状況とその必要性について報告した。その際、同大学日本語プログラムの問題として、図書館の日本学関連蔵書に限界があること、大学が環境への配慮のため電子書籍を重視する中、日本の書籍は紙媒体が多いこと、さらに経済的理由で学生の日本学関連書購入が難しいことなどを指摘した。

本セミナー立案には、参加者のうちマグヌスセン矢部直美氏（EAJRS 理事、オスロ大学人文社会学図書館）の協力が不可欠であった。同氏は北欧での日本学に関して、図書館に日本を専門とする人材が少ないなど、リソースの問題を感じていた。そこで両名の連携、つまりヘルシンキ大学を含む北欧での古典文学研究者によるセミナーを提案したのである。

この提案は、ヘルシンキ大学日本語プログラムが抱える問題への一つの解決策であった。現在、同プログラムに古典文学を専門とする常勤教員はおらず、古典の基礎知識や解読法を提供することは、通常にない学習機会となる。他方、名古屋大学の事業に北欧での活動は計画になかったが、従前の古典文学研究で北欧、フィンランドとの共同研究は稀で、新たな連携は当初計画を上回る成果となる。そこで北欧での活動が事業に追加され、海外経験豊富な関係者が講師に選ばれた。

2.3. 役割分担とコミュニケーション

上述した経緯により、畑が各講師への連絡と渡航手続き、講師としての講義準備を行い、布施が会場の手配、参加者の募集と連絡、通訳の手配など、現地での開催準備を担当した。

両者は、2018年9月から翌年10月までのおよそ1年間、主にメールで情報交換を行った。ともに日本語母語話

者であるため、開催時期、講義内容、講師、参加者、費用負担といった情報のやり取りに支障はなかったが、後述するように国や研究分野の違いはたびたび認識された。この200通以上のメールに加え、2019年3月にはパリで、対面による打ち合わせを実施した。これは当時、定期開催されていたフランス国立極東学院でのセミナーに合わせて行ったものである。

3. セミナーの内容と参加者の反応

3.1. くずし字セミナーコースのシラバス

セミナーはヘルシンキ大学言語プログラム修士課程の特別集中講義コースとして実施され、大学スタッフや学外者にも公開された。コースシラバスの概要は以下の通りで、セミナーはこれに沿って進められた。

- 履修対象者：ヘルシンキ大学修士課程学生（参加必須条件として日本語能力中級以上）
- 学習成果：
 - (1) 日本の文字の歴史と表記体系の理解を通じて、日本語能力の向上を目指す。また、日本の書物の歴史についても理解を深める。
 - (2) フィンランド国立図書館が所蔵する資料の読解を通じ、当地の日本学への貢献を目指す。
 - (3) 将来の日本学ネットワーク構築を目指す。
- コース内容：

室町・江戸時代に作られた絵巻・絵本などの日本資料を用い、くずし字の解読法を学習する。また、それが書かれた書物や形態にも触れることで日本の文字や書物、広く日本文化について学ぶ。

ワークショップとして、講師が平仮名の成り立ちや変体仮名について解説した後、参加者が絵巻、草双紙、浮世絵など、さまざまな媒体の中のくずし字を解読する。また、資料の扱い方を講義した上で、フィンランド所在の日本資料から調査法を学ぶ。

さらに講義として、日本の書物の装丁や料紙の概要、装丁と内容との関係などを解説する。講師が日本から持参した資料を用い、参加者が実際の資料を見たり触れたりする機会を設ける。
- コース評価：セミナー出席と、課題として合巻『仮名手本忠臣蔵』に関するレポートを課す。

3.2. セミナーの内容

講義は、2019年10月8日から11日まで4日間にわたって開催された。各日の講義内容は表1の通りである。な

表1 くずし字セミナーの内容

日程	講演内容・タイトル	講師	参加登録者数	備考
10月8日(火)	[ワークショップ形式] くずし字(変体仮名)の紹介	畑 有紀 (名古屋大学研究員)	32名	
10月9日(水)	[ワークショップ形式] フィンランド国立図書館の本 でまなぶ和書	津田 眞弓 (慶應義塾大学教授)	26名	会場は、フィンランド国立図書館の特別室 Monrepos-sali。教材は、同館所蔵の合巻『仮 名手本忠臣蔵』(外部貸出不可)。
10月10日(木)	[講義形式] 日本の絵本と絵巻	石川 透 (慶應義塾大学教授)	25名	教材は、石川氏持参の絵本・絵巻。
10月11日(金)	[講義形式] 日本の書物と挿絵の歴史	佐々木 孝浩 (慶應義塾大学教授)	49名	フィンランド語通訳あり(アレクシ・ヤル ヴェラ氏)。

お、講師の使用言語はいずれも日本語である。

参加者の多くは、ヘルシンキ大学の学生とスタッフ、卒業生で、各講義への参加者数は平均30名であった²⁾。ほとんどは日本語非母語話者で、これは当地での日本語イベントとしては異例であった。最終日の佐々木氏の講義への参加者数が最も多いが、フィンランド語通訳を設けたためであろう。ほか3回が通訳なしで行われたが、言語に関する問題は観察されなかった。これは、講師陣により日本語非母語話者向けの配慮がなされたこと、また次節に述べるように、実際に資料を手にとってみる機会があったことも講義理解の動機を高めるのに役立ったようであり、参加者の多くが内容を興味深く聞いていた。

3.3. セミナー後のアンケート結果

セミナー終了後、参加者へフィンランド語によるアンケートを実施した。ヘルシンキ大学のフィードバックICTシステムを利用してメール配信した質問は、以下の通りである。

- 日本語能力・学習歴、現在の所属・身分
- なぜこのセミナーに参加したか
- くずし字学習経験(場所、期間)
- 普段、江戸時代以前の文学・絵画などを読んだり、目にしたりする機会はあるか
- 日本語を今後も学びたいか、特に何を知りたいか
- 江戸時代以前の文学・絵画などを今後も読みたいか、特に何を知りたいか
- 全体の感想、最も印象に残ったこと
- 今後読んでみたいもの(時代、ジャンルなど)
- その他、改善案や要望

アンケートで12名の回答を得た。回答者のうち10名に複数年の日本語学習歴があり、参加動機は、日本文

化と歴史に興味を持っているためという回答が多かった。ただし、くずし字学習歴があるのは2名のみで、10名は初学者であった。普段、江戸時代以前の文学などに触れる機会があるという回答も、非常に少なかった。

興味深いのは、全員が今後も日本語を学びたいと回答、古典読解能力を高めたいという回答も複数あった点である。全体の感想には「テキストを自分で解釈したこと、絵巻の実物を見られたことが印象に残った」、「くずし字に対する抵抗感がなくなり、より積極的に学習してみようと思えた」といった、くずし字学習に肯定的な声が多い。「日本語学習を始めたばかりだが、日本語や日本文化の奥深さを垣間見ることができた」と、くずし字や古典籍資料は現代の日本語の学習者のモチベーションにも作用している。実際、「絵巻の実物を見る機会を得られたのが非常に良かった」など、7名が実際の古典籍資料が使用されたことに触れている。

そして参加者の多くが、古典から大衆文化まで幅広く興味を持ち、特に文学への関心が高いこと、さらに12名中8名が今後も同様の機会を得たいと考えていることも明らかになった。ただし、くずし字学習歴がある参加者からは「基本的な知識を広く扱うだけでなく、よりテーマを絞った専門知識の講義も望む」との回答もあり、参加者の知識背景に幅があることもわかった。

4. セミナーから見えた可能性と課題

4.1. 参加者と責任者らとの協働による複数の出版

セミナーを通じ得られた成果は、3つに大別できる。

1つ目に、コース参加学生と講師、責任者の協働作業により、合計9本の雑誌・論文・報文等を出版したことである。その詳細は表2の通りである。

9本のうち6本は、フィンランド日本文化友の会の年次刊行物 *HASHI* 特集号、または定期刊行物 *TOMO* 掲載の1記事として出版された。同会は1978年設立、

表2 セミナー関連の出版物

	著者名	題目	発行年	掲載誌(発行元)	備考
1	布施倫英、畑有紀、T. サロマー (編)	肉筆画から多色刷り版画へ: フィンランドの和書に見る挿絵の歴史とそのコレクション	2020	HASHI41 (日本文化友の会)	フィンランド語 特集号一冊の編纂
2	畑有紀、布施倫英	日本学資料の学際的利用の可能性と課題: 名古屋大学によるヘルシンキ大学くずし字セミナー	2019	EAJRS 年次大会発表要旨 (EAJRS)	英語
3	R. ランシサルミ、布施倫英	くずし字セミナーで学ぶ日本の文字と表記体系、書物の歴史	2019	ヘルシンキ大学人文学部ウェブサイト (ヘルシンキ大学)	フィンランド語
4	津田眞弓、布施倫英、小長光芳子、L. ケンツタ、T. ヘイスカネン、S. レポ	フィンランド国立図書館蔵合巻『仮名手本忠臣蔵』調査報告	2020	『慶應義塾大学日吉紀要 人文科学』35 (慶應義塾大学)	日本語 ウェブ公開あり
5	畑有紀、布施倫英	ヘルシンキ大学くずし字セミナー	2020	HASHI41 (日本文化友の会)	フィンランド語
6	畑有紀、布施倫英	ヘルシンキ大学くずし字セミナー: 日本の文字と表記体系、書物の歴史	2020	TOMO4/2020 (日本文化友の会)	フィンランド語
7	布施倫英、小長光芳子、L. ケンツタ、T. ヘイスカネン、S. レポ	フィンランド国立図書館所蔵の至宝: 日本コレクション	2020	TOMO4/2020 (日本文化友の会)	フィンランド語
8	畑有紀、(訳) 布施倫英、小長光芳子、L. ケンツタ、T. ヘイスカネン、S. レポ	くずし字入門	2021	TOMO1/2021 (日本文化友の会)	フィンランド語
9	畑有紀、(訳) 布施倫英、小長光芳子、L. ケンツタ、T. ヘイスカネン、S. レポ	くずし字入門: 日本語の文字の歴史	2021	TOMO2/2021 (日本文化友の会)	フィンランド語

※英語、フィンランド語の出版物は日本語に翻訳している (原題は参考文献を参照のこと)。

会員数約 370 名の友好団体で、その多くが日本に関する職に従事するか、日本文化に関心を持っている。彼らに専門的な知見を提供できたことは重要である。

また、とりわけ日本学研究がさかんであるとは言えないフィンランドにおいて、一連の記事を現地語で発表できたことも指摘したい。この数年で、講演やセミナーの内容が動画として記録されることも増えたが、以前は文章として残ることも稀であった。そうした中、本セミナーについては、日本から招いた 4 名の講師すべての講演内容を翻訳し、出版する予定である³⁾。これらは現在のみならず、今後フィンランドで日本や日本文化に関心を持つ人々に有益な情報となるだろう。

他方、講師の津田氏の指導の下、フィンランド国立図書館日本コレクション (後述) が所蔵する合巻『仮名手本忠臣蔵』の調査報告を日本語で発表したことも特筆に値する (表 2 中 4)。参加学生には日本語で学術論文を執筆する経験となり、コース責任者の布施も、他大学の研究者らとの協働執筆の機会を得た。さらにこの論文が、現存数の少ない『仮名手本忠臣蔵』をめぐる貴重な調査報告の一つとなったことは、古典文学研究においても有意義な成果である (津田ほか 2020)。

4.2. フィンランドにおける日本学への貢献

2つ目に挙げられるのは、フィンランド国立図書館日本コレクションを通じた、現地日本学への貢献である。

同コレクションは、1930年代以降のさまざまな寄附によるもので、古典籍を含む約1,400点の和書から成り、G. J. ラムステッド旧蔵書も確認できる⁴⁾。

1994年にその目録を作成したテロ・サロマー氏から提案があり、セミナー後、参加学生と教員の協働による展示会を同図書館で実施した (2019年12月2日～20年3月2日)。展示に携わった同館職員によると、展示は好評で、日本文学に興味を持つ人々に加え、市内の中学・高校で日本語を学ぶ学生と教員も訪れたという。

そして後日、セミナー参加者の1人によって、日本コレクション目録が電子化された。この参加者は国立図書館での職業訓練を申し込み、面接でコレクション責任者から電子化業務を提案されたという⁵⁾。これ以前には、サロマー氏作成の紙媒体の目録しか存在しなかったのだが、この人物により日本コレクションと、併せて所蔵される仏教コレクションの電子目録も完成した。

さらに、前節に挙げた『仮名手本忠臣蔵』に関する発見もあった。同書はそれまで下巻のみ確認されていたが、セミナーでこれに注目したコレクション担当者が、書庫で上巻を見つけたのである。同氏を含め、当時の図書館には日本語や和本を扱える専門司書がいなかった。この出来事は、こうした状況下でも専門家が現地の資料を取り上げることの重要性を示していよう。

またセミナーを端緒とする一連の取り組みが、学生、

司書、研究者など日本学に関わるヘルシンキの人々の連携を生んだことは、当初の想像を超えた収穫であった。そしてこれを、日本文化友の会による*HASHI*の一篇として記録できたことも大きな成果である(表2中1)。

4.3. 異分野協働の事例報告を通じた研究上の貢献

3つ目に、異分野協働、または学際的連携による教育事例を記録、発表することによる研究面での貢献を挙げたい。本セミナーは異国で活動する異分野の研究者による協働の実践例である。そこで報告者らは、セミナー直前の2019年9月、ソフィアでのEAJRS年次大会で、セミナーの計画・準備を通して見えた、その可能性と問題点を報告した(Hata and Fuse 2019)。

同じ日本を対象としながら、日本語教育と日本古典文学との協働事例は少なく、特にフィンランドを始めとする欧州と日本との間では稀である。前述の通り、EAJRSは欧州の日本資料関係者の集まりであり、現地で日本語やくずし字を扱える人材が減りつつあることへの対策という意味でも、好意的に受け止められた。

4.4. 国際的な異分野協働活動における障壁

他方、計画から実行に至るまでに、いくつかの問題点も見出された⁹⁾。以下、3つに分けて述べたい。

第一に、高等教育制度の違いに由来する問題である。例として、両国では学期が異なるために、開催時期の調整に手間取った。10月は、フィンランドでは新学期開始から1か月が経過しているが、日本では新学期の始まりで、複数の講師の渡航日程を定めるのは困難を極めた。その他、授業方法など慣習の違い、担当者間の役割分担、専門知識の不足もたびたび認識された。

第二に、異分野協働の教育活動として参照できる先行事例不足から生じた問題がある。実践記録の乏しさは、冒頭にも指摘した通りである。本セミナーに際しては、教育目的や達成目標の設定に苦慮したほか、教員と学生、または大学関係者と学外者による連携モデルが不十分で、計画は容易ではなかった。また、セミナーの内容や成果を教育に結びつける方法も模索することとなった。

第三に、教育目的での異分野協働に対する支援、特に助成金の少なさである。後述するように報告者らは次回計画を立てているところだが、大型予算の獲得は今後の課題である。

5. まとめ

5.1. 異分野協働の展望と課題

くずし字セミナーによって、日本とフィンランドの

間に、新たな教育・研究のネットワークが生まれたことは言うまでもない。報告者らの取り組みが多様な可能性を見出すことに繋がったのも、前章の通りである。古典籍資料が、日本の歴史や文化だけでなく現代の日本語を学ぶ上でも有用である点、さらにフィンランド所在の資料を教材とすることで、現地の人々の強い興味・関心を引いた点は、参加希望者の多さ、参加者のアンケート、展覧会開催等に至った事実から明らかだろう。特に、古典籍資料を日本語学習の一助とできたのは、古典文学研究者が講師となったためになし得たことで、双方の連携がうまく作用したものと言える。

その一方で、異なる国、異なる分野同士の協働には、問題点も見出された。とりわけ距離の問題は、近年のコミュニケーションツールの発達により改善の余地があるだろう。加えて、本稿を含む実践記録の蓄積や、金銭的支援の拡充、またそれに付随して、高等教育における異分野協働教育の実践への評価体系の構築が望まれる。

5.2. 新たなセミナー「日本文学と食」

報告者らは、フィンランドにおける日本文学への関心の高さを改めて認識し、現在「日本文学と食」をテーマとしたセミナー企画を進めている。前述のアンケート回答からは、参加者の多くが文学以外の分野にも興味を持っていることが明らかになっている。食が国境を問わず普遍的なテーマであること、現地での日本食の人気の高さなどからこのテーマを選定し、内容や講師の検討を行っているところである。

今後も、この異分野協働の取り組みを継続することで、セミナーで培った両国間のネットワークを一層発展させていきたい。

謝辞

セミナーの実現と成果達成においては、多くの方々の協力を賜った。津田真弓教授、石川透教授、佐々木孝浩教授、マグヌスセン矢部直美氏、フィンランド国立図書館古典コレクション関係者、ヘルシンキ大学関係者、名古屋大学関係者、そしてセミナーに参加してくださった皆様に、感謝申し上げます。

注

- 1) オスロ大学、ベルゲン大学でもセミナーを開催した。
- 2) 当日欠席の通知や追加参加の問い合わせもあったため、実際の参加者数は変動があった可能性がある。
- 3) 佐々木氏(Sasaki 2021)と畑(Hata2021a & 2021b)担

[資料・報告]

- 当分は出版済みである。また 2022 年 5 月現在、津田氏、石川氏の講演についても翻訳出版の準備が進んでいる。
- 4) 1873-1950. フィン日外交関係を樹立した初代駐日フィンランド公使であり、ヘルシンキ大学日本語講座の創始者。
 - 5) 日本コレクションの電子カタログを作成した担当者とのメール交換により、布施が情報を得た。
 - 6) 本稿は教育目的での学際的連携の事例だが、日本の学術振興会に相当するフィンランドアカデミーは、学際研究の障壁として、①構造的障壁、②知識の障壁、③文化的障壁、④認識論的障壁、⑤方法論的障壁、⑥心理的障壁、⑦受容における障壁、の 7 つを指摘する (BRUUN et al. 2005)。

参考文献

- BRUUN, H., HUKKINEN, J. I., HUUTONIEMI, K. and T. KLEIN, J. (2005) *Promoting Interdisciplinary Research: The Case of the Academy of Finland*, Publications of the Academy of Finland, 8/05. Academy of Finland, Helsinki. https://www.aka.fi/globalassets/awanhat/documents/tiedostot/julkaisut/8_05-promoting-interdisciplinary-research-the-case-of-the-academy-of-finland.pdf (accessed 2022. 04. 01)
- FUSE, R. (2018) What are "Japanese Studies Resources" for Finnish Students?, EAJRS 2018 conference proceedings. <https://www.eajrs.net/what-are-japanese-studies-resources-finnish-students-2018> (accessed 2022. 02. 21)
- FUSE, R., HATA, Y. and SALOMAA, T. (eds.) (2020) *HASHI: Sivelimestä moniväripainoon: Japanilaisen kirjan kuvituksen historiaa ja kokoeimia Suomessa*, 41, Japanilaisen kulttuurin ystävät ry, Helsinki.
- FUSE, R., KENTTÄ, L., OSAMITSU, Y., REPO, S., and HEISKANEN, M. T. (2020) Kansalliskirjaston japanilaiset aarteet: Japonica-kokoelma, *TOMO*, 4/2020:6-12.
- HATA, Y., and FUSE, R. (2019) Possibilities and challenges of interdisciplinary utilization of resources of Japanese studies: The case of the kuzushiji seminar at the University of Helsinki offered by Nagoya University, EAJRS 2019 conference proceedings. <https://www.eajrs.net/possibilities-and-challenges-interdisciplinary-utilization-resources-japanese-studies-case-kuzushiji> (accessed 2022. 02. 21)
- HATA, Y. and FUSE, R. (2020a) Kuzushiji-seminaari Helsingin yliopistolla 2019. *HASHI*, 41:4-5.
- HATA, Y. and FUSE, R. (2020b) Kuzushiji-seminaari Helsingin yliopistolla: kirjoitusmerkit, kirjoitusjärjestelmä ja kirjojen historia Japanissa. *TOMO*, 4/2020:20-22.
- HATA, Y. (2021a) Johdanto kuzushiji -kirjoitukseen (FUSE, R., KENTTÄ, L., HEISKANEN, M. T., OSAMITSU, Y., and REPO, S., trans.), *TOMO*, 1/2021:9-12.
- HATA, Y. (2021b) Johdanto kuzushiji -kirjoitukseen: japanilaisten kirjoitusmerkkien historiasta (FUSE, R., KENTTÄ, L., HEISKANEN, M. T., OSAMITSU, Y., and REPO, S., trans.), *TOMO*, 2/2021:9-11.
- LÄNSISALMI, R., and FUSE, R. (2019) Japanilaiset kirjoitusmerkit, kirjoitusjärjestelmä ja kirjojen historia tutuiksi Kuzushiji-seminaarissa, Humanistinen tiedekunta, Helsingin yliopisto. <https://www.helsinki.fi/fi/humanistinen-tiedekunta/ajankohtaista/japanilaiset-kirjoitusmerkit-kirjoitusjarjestelma-ja-kirjojen-historia-tutuiksi-kuzushiji-seminaarissa> (accessed 2022. 02. 21)
- 中川健司 (2021) 日本語教育における異分野との協働実践にはどのようなものがあるか—CiNii 掲載論文の分析から—。ときわの杜論叢 8 : 53-62
- SALOMAA, T. (1994) *Annotated Catalogue of the Japonica Collection*. Helsinki University Library, Helsinki.
- SASAKI, T. (2020) Japanilaisen kirjan ja kuvituksen historia (JÄRVELÄ, A. trans.), *HASHI*, 41: 6-21.
- 津田真弓, 布施倫英, 小長光芳子, ラウラ・ケンツタ, ミカ=テツ・ヘイスカネン, サンツトウ・レポ (2020) フィンランド国立図書館蔵合巻『仮名手本忠臣蔵』調査報告. 慶應義塾大学日吉紀要 人文科学 35: 221-244. http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10065043-20200630-0221 (accessed 2022. 04. 11)
- VUORINEN, P. (2021) Japanese special collections catalogued in the Finna search service. <https://www.kansalliskirjasto.fi/sv/node/1891> (accessed 2022. 05. 08)

2022 年 5 月 27 日受理

† Yuki Hata* and Rie Fuse**, Practices of interdisciplinary collaboration between Japan and Finland: Kuzushiji seminar at the University of Helsinki

* Sakeology Center, Niigata University. 8050, Ikarashi 2-no-cho, Niigata City, Niigata, 950-2181 Japan.

** Faculty of Arts, Department of Languages, University of Helsinki. P.O.Box 59 (Unioninkatu 38) 00014 University of Helsinki, Finland.